

Title	ソフトウェア開発組織におけるイノベーションの障壁—日本におけるアジャイルソフトウェア開発手法の採否の機序—
Author(s)	関, 信彦
Citation	
Issue Date	2024-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	ETD
URL	http://hdl.handle.net/10119/19060
Rights	
Description	Supervisor: 神田 陽治, 先端科学技術研究科, 博士

論文要旨

本研究は、研究のアプローチおよび実証的なエビデンスが乏しいサービス組織のイノベーションに関わる知見を提供するものである。本研究ではアジャイルソフトウェア開発手法を、日本企業でソフトウェア開発を行う組織にとってのイノベーションとして位置付ける。日本のソフトウェア開発組織のアジャイルの受け入れ事象を通じ、サービス組織のイノベーションの受け入れに関する洞察を行うことを本研究の狙いとする。

アジャイルソフトウェア開発の採用と普及については、世界に比較すると日本は遅れているというのがここまでの一般的な理解である。ただし、アジャイルが発祥して20年が経とうとしている現在、日本における真の実態は明確に把握できない。本研究では、アジャイルに対して足踏みしている状況を「採用はしているが、事業組織内に展開・普及がされていない」と仮定している。こうすることで、足踏みしている事象を、国内の事例の増進がなく、アジャイルの活性がなされていないという見立てをしている。そこでアジャイルに対する足踏み事象の要因について演繹的に追及を試みることを本研究の目的である。本研究では足踏みをする事象に対するアプローチの一つとして、日本のソフトウェア開発組織のアジャイルの採用、すなわちイノベーションの受け入れをケースに、サービス組織を阻む障壁に着目をする。イノベーションの採用を巡り組織はどのように障壁に支配されるのか、あるいは障壁は克服されるのかについて推察し、サービス組織として日本のソフトウェア開発組織がアジャイルを採用し、普及させるための方略に関する示唆を示すことを目指す。

本研究の目的に向けて、事象に対して次の3つのテーマをもって探究をすすめる。それらは、1) アジャイルの採用と普及の主導はどのように行われるのか、2) 組織環境はどのように採用と普及に影響するのか、3) どのような障壁が採用と普及を阻むのかである。そして、本研究の分析によって結果として次のことが明らかになった。ソフトウェア開発組織におけるアジャイルの採用は、1) 組織を新たな手法の採用に駆動させる駆動源としてプロジェクトマネージャーが主導する現場によるボトムアップで進行すること。組織的な取り組みとしてその上席であるIT組織の部門長との間でアジャイルに対する考え方の同期と支援が重要である。ただし、2) 多くの事業組織はアジャイルの採用を事業組織に展開、普及することに対して創発的に支援する環境を持っていない。そこには、3) 開発現場に発生する採用に向けた障壁だけではなく、事業組織内の開発現場周辺においてアジャイルの展開、普及を阻む障壁が存在する。

これらを踏まえ、本研究の考察では、日本におけるアジャイルの足踏みの現象

を次のように説明する。1) 現場の推進者の個による採用に対し、事業組織は組織的な展開・普及の支援を行っていないために、事業組織内での展開・普及は進まない。そのような事業組織では「知識の障壁」が高まることによりアジャイルの採用を先延ばしにする。それは、2) 新たな取り組みに対して事業組織として創発的に取り組む環境ではないことによるものである。採用を阻む障壁として、3) 現場での採用障壁だけではなく、これに加え、ミドル・マネジメント、普及への支援的な立場になるバックオフィスと称される周辺部門は「ミドル層による障壁」と化し、現状維持の状態を暗黙的に作り上げ、「知識の壁」を更に高く作用させることでアジャイルの採用の先延ばしを助長する。

ここに至るまで、事業組織におけるイノベーションに対する障壁を包括的に説明するモデルは存在しない。そのために、アジャイルの足踏みを「組織文化」や「組織の知覚」という短絡的な議論でこの問題を置き去りにしてしまっている。本研究は「知識の障壁」の概念の拡大と再構成を行い理論的モデルとして「事業組織におけるアジャイル普及障壁モデル」と、当該モデルにおける「採用障壁」と「ミドル層による障壁」の理解を深めるための実務的モデルの提案を行うものである。

キーワード：アジャイル、サービス組織、イノベーション、採用、障壁